

James Joyce の “A Painful Case”

—— 『ダブリン市民』再読 (5) ——

田 畑 榮 一

作者自身が、“After the Race” とならぶ最悪の短篇だと言った “A Painful Case” は、読みようによってはきわめてメロドラマ的である。「1906年には、ジョイスはまだ十分に伝統的な作家であった」というような作家像からすれば、なおさらそうである (Volker 31, qtd. in Wicht 130)。

このようなガイドブック的な読解を適用するなら、この短篇は次のような要約に収まるだろう。

「自意識の高い、もったいぶって自らを高しとする中年男が、女の愛の要求に接して、自分の道德感からこれを拒絶し、女を死にいたらしめる悲劇。女は文字どおり死に、男は一種の死である孤独地獄におちる愛の挫折の物語である。しかし注意すべきは Mrs Sinico の死は、新聞の三面記事にふさわしい「痛ましい事件」であるが、Duffy 自身の倫理感がみじんに崩壊し、彼自身、人生の饗宴から追放されたことを自覚し、天涯孤独の世界におちることこそ「痛ましい事件」なのである」(工藤, 98)。

タイトルはあいまいにダッフィとシニコ夫人のそれぞれの “cases” を指示している。ジョイスがタイトルを “A Painful Incident” から変更したことで、その意味論的効果がより強められることになった。孤独感から酒に溺れ、深夜、“spirit” を買いに外出した夫人は機関車にはねられて死亡する。婦人の deadly accident はまた修辭的な意味でダッフィの deadly case でもあるというのだ。

だが、Leonard や Wicht のような revisionists によれば、禁欲的で道德的な、という統一された自己 (self) の image を構築してきた人物の挫折 (“He felt that he was alone”) を語るはずの story は、他方、text によってすでに “deconstruct” されているのであって、ending

では、いったん “fragmented moi” (こなごなになった理想自我) とみえたものが、もとの自己充足的なものへと再構築が進行するという reading も可能なのだ。

“alone but no longer lonely” という心境を確認したダッフィは、発端において enjoy していた “self-sufficiency” へところどころよくたち戻るといっているのである。物語というものは、まかり間違えばそうになっていたかも知れない物語の亡霊につきまとわれているものなのだ。(C. Brook-Rose, 192)。この視点からみれば、1906年のジョイスはすでに、“a traditional short story writer” からはほど遠い存在だったのである。

Mr James Duffy lived in Chaperizod because he wished to live as far as possible from the city of which he was a citizen and because he found all the other suburbs of Dublin mean, modern and pretentious. (イタリックは筆者)

「ジェイムズ・ダッフィ氏はチャペリゾッドに住んでいた。というのは、自らその市民の一人であるダブリンからはできるだけ離れて住みたいと思っていたし、他の郊外はすべて、品がなく、モダンで外見ばかりとりつくりつた場所だったからである」

ダッフィの自ら選んだ孤立を強調する narrative は、疑問を解決したかにみえる瞬間、おなじ程度に懐疑を喚起するようである。「すべて」という抱括的な “all” は、一般意味論の学者なら “allness” (全体判断) とよび、事実の記述よりも発話者 (ダッフィ) の二値論的思考の強いメンタリティを指摘するだろう。やがて明らかにな

るように、この男は word-fact relations ではなく、word-word relations のフレーム・ワークで生きているのだ。最初から narrative は、主人公の ego-centric な主観性を提示する。

ダッフィの自己の感覚 (the sense of himself)、つまり彼の reality は、“The Dead” の Gabriel Conroy と同じく、他者たち (others) との関わりにはことにせい弱である。彼の reality とは、たつぷりと fantasy に従事することである。したがって他者との接触は厳重に検閲されねばならない。なぜなら、彼らはほぼ確実に、ダッフィの理想的な自我に脅威をあたえるからである。ダッフィが私的空間を構築するために、彼の部屋の家具を買いそろえたそのそろえ方をみれば、この検閲のきびしさがわかる。

“The lofty walls of his uncarpeted room were free from pictures. He had himself bought every article of furniture in the room.” (イタリックは筆者)

カーペットもなく、写真もなく、鉄製のベッド、鉄製の洗面台、四角のテーブルとその上のダブルデスクしかない、修道院を思わせる殺風景な部屋なのだが、何よりも注目すべきは、ダッフィ自身がそれら「すべて」を買いそろえたということだ。

親戚からも友人からも家具をもらったことは一度もない。そしてこのことはダッフィにとって、ある種の「安らぎ」の源泉なのである。家具ですら、彼のものとは異なる “history” をもつとしたら、それは一定の「他者性」(otherness) をふくんでいることになる。この他者性が、ダッフィの理想的イメージに対して敵意ある視線をおくり続けるかのような感覚をもたらすのだ。“A Little Cloud” の Little Chandler は、妻の選んできた家具が、彼女にただよう「下品さ」(meaness) を感じさせ、壁に掛かる彼女の写真の冷たい視線に酷似しているのを見る。家具をみずから購入することによってダッフィは、彼の “his(s)tory” と矛盾するような history は身近かには存在しないと確信できるのだ。他者たち (others) の視線 (gaze) は、ラカンによれば「他者」(the Other)

の原初的な gaze——それは人の unity を確認するか、くつがえすかする視線なのだが——を表象するものだが、それは実際に当人を見つめている近くの人物から来る必要はない。それは「彼」が、その下で秘かにわれわれを待ち伏せていると思えるような窓であってもよいのである (1988, 220)。

ダッフィは、自己との居心地のよい関係を維持するために、かなり賢明な策を弄して、慎重に選んだ空間 (仕事の間 (銀行)、昼食をとる店、夕食をとる店の三つの空間) において自分を “overexpose” する (Leonard 210)。そのため、彼はあまりにも familiar な存在となって、いわば「当然の存在」とみなされ、あえて近づく人はいなくなるのである。他者が会話を試みる可能性を前もって閉ざしてしまったうえで、どうしても人と会話を交わす必要にせまられたときには、その「不安」に他ならないものを、自身の知的優越性の副作用と誤解することもできるのだ。ダッフィ氏の孤立の深さが彼にとってきわめて重要なのは、それを自分の知性を測る尺度として用いることができるからである。

短期間ではあるが、Irish Socialist Party のミーティングに出席したことがある。このような “public” な集まりへ彼があえて参加したことについてよく考えれば、その場のダッフィのプレゼンスというのは、彼の孤立をやわらげるためというよりは、むしろそれを強化するのに貢献していたことがわかる。

“He had felt himself a unique figure amidst a score of sober workmen” (D 110) . (イタリックは筆者)

これが暗示するのは、このような場では彼は口を開かないということである。さらに労働者たちのテーマ、“leisure” と “higher wages” はダッフィがすでに享受しているものであっても、彼らは、それを欠くために、自分の学識を知らしめ、感嘆させることは不可能だということになるのだ。彼の “uniqueness” の源である “leisure” は「富」と同様、「下品」で非知性的なものの結果かもしれない、と考えるかわりに彼は leisure time を使いうるという事実を、この労働者たちから自己

を識別する特性と思いこむことができる。現実には、その“leisure time”を用いて書き上げることができたのは、たとえばシニコ夫人との絶交後の二ヶ月間においては、二つの sentences にすぎない。この党が三派に分裂した後は、会合に出ることはなく、彼は他者の視線を消毒済みの自室へと戻る。

He had an odd autobiographical habit which led him to compose in his mind from time to time a short sentence about himself containing a subject in the third person and a predicate in the past tense. (イタリックは筆者)

「彼には奇妙な自伝癖があって、ときどき心のなかで自分について短いセンテンスをつくったりした。それは三人称の主語と過去形の述語から成るものだった」

自我 (ego) とは、主体に見せかけだけの統一性を付与すべく構築されたもの (construct) である。こうして他者たちに、自己を正当化させるに必要な一貫性が得られることになる。他者をまきこもうとするこの主体 (speaking subject) はラカンの“Je”あるいは“I”という主体性の第二の dimension なのだ。そして、自己を定位するのはシンボルの交換をつうじてである。ところがこの短篇では「聞かせよう」として努力する他者の声は存在しない。ロタンダ劇場でシニコ夫人が“empty house”について短い発言をしたあとは、“directly reported speech”は存在しないのだ。ダッフィは真空状態のなかで「話して」いるようにみえる。だが、ある意味で、彼の内なる言説は、バフチンが「かくれた論争」(a hidden internal polemic) (PDP, 195) と名づけた言説といえるだろう。作品内には分節されてない他者の発話を予想し、それに応答し、または考慮に入れるといった言説である。「こうした言葉は、他人の言葉や答えや反駁を前にしたり予感したりして、まるで顔をひきつけているかのようだ」とバフチンは言う。

ダッフィがかくも熱心に従事するナルシズムは、ラカンの“ideal ego” (理想自我) あるいは“moi”と対応

する。この primary narcissism は、ラカンによれば鏡像段階において形成される。この段階では、主体は首尾一貫したイメージを自己の統合された identity の表象と誤認する。のちの secondary narcissism とともに、主体は先の虚構的統一性を認知すべき他者をさがし求める。これら他者たち (ラカンの“ego ideal” (自我理想)) は、the moi の alter ego として機能する。だが、ダッフィの life style は次のとおりである。

He lived his spiritual life without any communion with others, visiting his relatives at Christmas and escorting them to the cemetery when they died.

「彼の精神生活には、他人たちとの交流 (“communion”) は一切なく、クリスマスには親戚を訪ね、彼らが死ぬと墓場へ送っていった」

冒頭に引用したように、ダブリン市そのものが忌避すべき視線 (gaze) をもっている。そこから “as far as possible” に生きるのみならず、夕方の散歩もそのコースは “the outskirts of the city” (D109) に限定されるのである。このダッフィとダブリン市との関係は (彼はこの市を憎み、そして恐れているのだが)、他者たちとの関係にもあてはまる。ダッフィは、自分の尋常でない他者の忌避を病理的なものだと認めない。自分の view point を特権的なものとする彼の空想によれば、自分には Hauptmann や Nietzsche を読み、また執筆するにじゅうぶんな閑暇が必要であって、さらに、自ら後者の弟子としての自負があるので (もちろんダッフィが理解するかぎりでの Nietzsche なのだが)、社会的、社会的な義務に深入りすることは卑小な行為として極力、排斥すべきことなのである。

He lived at a little distance from his body, regarding his own acts with doubtful side glances.

「彼の生活は、自分の肉体からはすこし距離をおいて、その行動を疑わしげに横目で眺めるといったようすだっ

た」

Kershner のいう “disembodiment” のテーマ (112) が顕在化したものだが、あまりにも長期にわたって孤独のうちにすごしてきたために、ダッフィとしては可能なかぎりの “the art of his own Other” (Leonard 215) を完成させてしまったともいえる。彼の “body” が行動し、“mind” はこれをその reality を疑うまでに不信の眼で見るのである。A. Korzibsky らが攻撃した病的な二値論的言語をとおして、「個人的な Symbolic Order」をつくろうとするのだ。彼は実体と（ときには食物とさえ）言葉とを混同する人物である。その意味でダッフィは言葉からなる人物である。彼の習慣の一つは「夕刊をデザートにして読む（食べる）ことである “reading the evening paper for dessert” (D 112)」。言葉がダッフィを構成する。彼はそれを食し、それをとおして “artistic expression” をよそおい、情熱の代わりにシニコ夫人に差し出すのである。二人の四肢がからみ合うことは決してないにしても、のちに “little by little he entangled his thought with hers” (D 110) と語られる。

個人的な Symbolic Order を生みだそうとするかぎり、他者は彼の閉鎖回路 (word-word relations で成立する世界) に対して完全に部外者となる。こうしてその回路のなかで、ダッフィは自己 (self) の存在を正当化できる。Leonard がいうように、この奇妙な習慣は、ダッフィに “He has lived” という確信をあたえるかも知れないが、“He is living” と信じこませる説得力はないであろう (215)。誰かのまなざしを仮想し、かくのごとく記述されたいと思うやり方で自らの姿をセンテンスにして語ろうとするとき、ダッフィの居場所はどこにあるのだろうか。

human ego とは、ラカンが明らかにしているように paranoid である。ダッフィはぬきんでて paranoid である。自分が何ものなのか、という問題はつねに自分の意識的コントロールの下にあると確信しているのである。つまり彼は自分の鏡像との融合を確認しようとするのだが、そのためには「現実」の三人称 (The Third Person) が必要となる。その一貫した反映が、主体の想像上の

psychic unity を正当化するのである。しかし、これは飽くことなき欲望のかたちをとって、永遠の自己疎外を導入することに他ならない。「主体は象徴界に取りこまれて、もはや表象され、言説の媒介によって表現されるしかなくなるので、主体は自分自身に仕かけられた罠に迷い込み、他者のまなざしに従って加工されてゆくことになる。さまざまな理想像への同一化、あるいは自己自身を合理化する言説は主体が凝結し、自らを裏切ってゆくときの形式である」 (Lemaire 262)。

ダッフィはもともと存在欠如の徴候 (symptom) であったものを生得的で自然なものとして扱おうとする。彼はその identity を他者なる何ものかに投射したことがないので、彼自身を写しだす “mental snapshot” (Leonard 216) はすぐに色あせるだろう。ダッフィは自己のイメージを過去形で構築できる。だが、人間主体を支えるのは他者の認知と反映である。「人間は彼のかたちを全体として、自己の mirage として、自己の外側に具象化されているのを見る ... われわれが異なる [mois] をたがいの関係において定位できるのはシンボルの交換をつうじてである」 (Lacan 1988. 140)。

She asked him why did he not write out his thoughts. For what, he asked her, with careful scorn. To compete with phrase mongers, incapable of thinking consecutively for sixty seconds? To submit himself to the criticism of an obtuse middle class which entrusted its morality to policemen and its fine arts to impresarios?

「どうしてご自分のお考えを発表なさらないの、と彼女はたづねた。何のためにです？彼は慎重な冷笑をもって問いかえした。1 分間もつづけてものを考えることができなくせに、美辞麗句ばかりならべたてる連中と張り合うためにですか。モラルの問題は警官にゆだね、美術となるとディレクターにまかせっきりという頭の悪い「中流」の批評にさらすためにですか？」

ダッフィは自らの “ego ideal” (自我理想) にはなり得ない。ただ彼の “ideal ego” (理想自我) を確認すべ

く誰を誘い入れるかについてはきわめて慎重になることができる。このような他者は完璧に無私“unself-absorbed”でなければならない。そしてダッフィがこのような人物を愛するとしたら、それは、この人物の欲望があらゆる局面で、ダッフィが欲望される必要があると思うとおりのやり方で対応してくれていると感じられるかぎりにおいてである。

シニコ夫人はまさしくこのような人物であったのだ。

“love”はimaginary levelでおき、the symbolicを鎮圧し (provokes a veritable subjugation of the symbolic)、“perfection”への door をひらくのである (Lacan 142)。

ようするにダッフィはシニコ夫人を信じた (believed in)。ということは、彼にすれば夫人がダッフィの自我を認知、正当化してくれたということだ。ただし、事実はこの belief とは、自分自身に対するダッフィの不信 (disbelief) の徴候にすぎないのである (Leonard 217)。のちに、シニコ夫人が彼にとって表象していた“the Woman”としての figure を信じられなくなるような行動にでたとき、ダッフィは、これまであれほど念入りに抑圧してきた the disbelief in himself と突然直面させられるという危険を感じとる。予期できるように、ダッフィの防衛策は、シニコ夫人を不自然で、品性を落した存在として、捨てることになる。

ダッフィの部屋という“reality”の外側というのは、ダッフィの life が夢にすぎず、それを「解釈」することを回避することでようやく耐えられる空間であるにすぎない。

“One evening he found himself sitting beside two ladies in the Rotunda.”

これはまるでダッフィが自室で失神し、気がついてみると劇場にいた、と受けとつてもよさそうな narration ではないか。空席が目立ちすぎる場内を見まわして隣りに座った ladies の一人が言う。

What a pity there is such a poor-house tonight ! It's so hard on people to have to sing to empty benches.

実は比喩的に言えば、ダッフィもシニコ夫人も人生のかなりの期間、“empty benches”にむかって“sing”してきたのである。ダッフィはその修道院的な部屋で孤独のうちに、そしてシニコ夫人は“no audience”よりも悪質な夫の無関心にむかって。

シニコ夫人のこの発言はもう一つのメッセージをふくんでいると Leonard は指摘する (218)。夫人はすでに“to sing to empty benches”に疲れてしまった。価値ある performer になら、たとえそれが誰であっても理想的な audience として自分を present する用意があるというのだ (ダッフィがのちに自分の私生活をうちあけはじめたとき、“She listened to all”と語られる)。

He took the remark as an invitation to talk. He was surprised that she seemed so little awkward. While they talked he tried to fix her permanently in his memory.

... Her face which must have been handsome, had remained intelligent. It was an oval face with strongly marked features. The eyes were very dark blue and steady. Their gaze began with a defiant note but was confused by what seemed a deliberate swoon of the pupil into the iris, revealing for an instant a temperament of great sensibility. The pupil reasserted itself quickly, this half-disclosed nature fell again under the reign of prudence, and her astrakhan jacket, moulding a bosom of a certain fullness struck the note of defiance definitely. (イタリックは筆者)

「ダッフィはこの言葉を会話への誘いと解釈した。この夫人にはぎこちないところがほとんどないことに彼はおどろいた。話のあいだダッフィは彼女の姿を永久に記憶にとどめようと思った。... その顔は、かつては美人だったにちがいないと思われたが、いまなお知的な風貌を留めていた。それは輪郭のはっきりしたオーバルフェイ

スだった。

眼は濃いブルーで、相手をじっと見つめている。その眼に見つめられると、はじめは挑戦的な感じをうけるのだが、やがて瞳がゆっくりと喪神してゆくといったようすで虹彩のなかに溶けていった、と次の瞬間、非常に鋭敏な感受性がひらめいて、すばやく瞳が自己主張するかのように前に出ると、このなかばあらわになった本性は、ふたたび思慮深い慎しみのもとに制御されるかのようなようだった。そしてアストラカンのジャケットは相当なふくらみをもった胸をかたどり、いっそう挑戦的なようすをあらわしていた」

シニコ夫人のまなざしのうちにある瞳 (pupil) と虹彩 (iris) との緊張は、ダッフィが「他者」(the Other) との関係でつねに感じているドラマを要約する。彼は自分が想像するとおりの自己を支持し確認してくれる何かにかこまれていたいと思う一方で、その確認されるべき構造が想像的なものにすぎないため、もう一つのレベルではそれに吸収され、自律性を喪失するかもしれない恐れを感じるのである。ダッフィを魅きつけ、しかも恐れさせるのは、シニコ夫人の “a temperament of great sensibility” なのである。二人の関係を破局へみちびくものは、この夫人のまなざしのなかにすでに予告されているかのようなのだ。ダッフィが夫人を捨てるのは、彼女の欲望が “reassert” する瞬間においてである。このときシニコ夫人のまなざしの中心にある “a temperament of great sensibility” はダッフィをのみこむ渦巻のように感じられるのだ。

夫人のまなざしによって招きよせられた “swoon” は、ダッフィに、自分が夫人の欲望の対象であると想像させかねない。そしてその “swoon” がすぎ去ると、“the reign of prudence” が “reassert itself” するのである。自我が肥大し、(性的) 欲望が極小化したダッフィには、夫人の “bosom of certain fullness” は “prudent” な彼女の「母性」として受けとられる。いわばラカンの“(m)Other” として機能することになるのだ。事実、のちに、“with almost maternal solicitude she urged him to let his nature open to the full; She became her

confessor.” と語られる。

シニコ夫人は、ダッフィが自己のために創造 (捏造) すべくつとめてきた “the third person” として自分を present しようとする。だが、彼がつくりあげた “the Woman” としての “Mrs Sinico” を超えたところで彼女は生きつづけている (ex-ist)。したがって、もしも “a temperament of great sensibility” を顕示している彼女のまなざしの一部が「現実の」小文字の “a woman” のまなざしとして “reassert” し、シニコ夫人個有の欲望として、ダッフィの「反映」ではない「他のもの」として認知されたいという欲望を露わにするなら (つまり現実界 (the Real) の intimations に対しては)、ダッフィはきわめてぜい弱な存在となるのである。

見方を変えれば、ダッフィと語り手は male gender ideology を分ちもっている。当然、シニコ夫人は自分の声をもたない存在として扱われることになる。

Little by little he entangled his thought with hers. He lent her books, provided her with ideas, shared his intellectual life with her. She listened to all. (イタリクは筆者)

文法的な subject と functional な subject のポジションを占めるのは “he” であり、“his” である。“she” が文法上の subject になるとき、彼女はまったく彼に依存するものとして語られる。

feminists なら、“man” はネガティブな “female other” に自己を対置することで自らを定義する、というだろう。Irigaray がいうように「女性」はつねに「欠陥」または「退化」として定義される。反対側の sex のみが価値に関して独占権をもつかのように定義されるのだ (Irigaray, 69)。

この短篇は文化的に dominant な male discourse を模倣する。だが引用の一節にみられる male value の前景化そのものが、読者に narration の価値観について疑いをもたせる契機ともなり得るのである。テキストは narration のコントロールに反して作用するのだ。こうして読者は、ダッフィ氏の側からのみ二人の関係を見る

のだが、それは、ダッフィが彼にとって必要な“Mrs Sinico”を創造してゆくプロセスをたどることでもあるのだ。

この“creation”はダッフィの理想化された moi identity の alter ego として彼に反映し返してくる。二人の会話は“a dark discreet room”で、先述したように rhetorical intercourse が sexual intercourse と等価であるかのごとく行われるのだが、その関係 (verbal relationship) はより拘束的なものになってゆく (“they spoke of subjects less remote” (D 111))。ダッフィは夫人を彼の“the third person”つまり「ときどきダッフィ自身について、彼の心のなかに短いセンテンスを書きこむ」ような人物として登録しようとしようとする。彼は確固たる統合された自己 (self) の外部の源泉を欲するのである。

シンコ夫人の家でなされた「密会」(Mr Sinico は誰かが自分の妻に興味をもつとは思ってもみなかったので、ダッフィを娘の求婚者だと思いこんでいた) を、narration は「告解」(confessional) とよぶのだが、“She became his confessor” (D 110)、彼女にうちあげ話をするダッフィのやり方には暗黙の暴力性がある、その密会ごとに、夫人の存在を、ダッフィの自我の相関的な機能をはたすものにすぎない存在へと還元しようとする。ナルシズムがダッフィを emotional な、または erotic なかわりから締め出してしてしまうのである。

夫人が彼の“confessor” (聴罪司祭) であるとか、先の、他者との交流を“Communion”とかいう terminology には、ダッフィの意識の外側にある、どこか奇妙な register (バプチン的な意味での言語使用域) を前景化する。ダッフィはまたメイヌースの「公教要理」(Maynooth Catechism) を蔵書に入れている。修道僧的なストイシズムがどこに由来するのか興味深いことでもあるのだが、同時にこの passage は、ダッフィの尊大さのメタファーでもある。テキストは、sacramental terminology と ego-centric な伝記的衝動とが到底調和しないことを暗黙のうちに示すとともに、公然とダッフィの内部の矛盾を指摘もする。

He thought that in her eyes he would ascend to an angelic stature.

「彼女の眼には、自分は天使の高みに昇るものに写っているだろう」

テキストは、ダッフィの自己中心性について暴露しているのだが、皮肉なことに、語り手も主人公もそれに気づいていないようなのである。

This union exalted him, more away the rough edges of his character, emotionalised his mental life.

「このような結びつきは、ダッフィを高揚させた。彼の性格の粗い角をなめらかにし、その精神生活には濃やかな感情が流れはじめた」

しかし次に読者が聴くのは奇妙なダッフィの反応である。

and, as he attached the fervent nature of his companion more and more closely to him, he heard the strange impersonal voice which he recognized as his own, insisting on the soul's incurable loneliness. We cannot give ourselves, it said, we are our own. (イタリックは筆者)

「相手の情熱的な性質をより強く自分に惹きつけてゆくにつれて、ダッフィは奇妙な、個人的感情を超越した声を聞いた。そして、その声は自分の声にはかならず気がついたのだった。それは、魂の癒しがたい孤独について執拗に説いていた。われわれは自分をことごとく与えることはできない。われわれは結局、われわれ自身のものにすぎない、とその声は言っていた」

これにつづく夫人の行為はまるでダッフィの“impersonal voice”に反応するかのようである。

The end of these discourses was that one night during which she had shown every sign of unusual excitement, Mrs Sinico caught up his hand passionately and pressed it to her cheek.

「こういう会話のすえに、ある夜、夫人はこれまでにない異常な興奮のさまざまなきざしをみせたあと、ダッフィの手をとり、熱情的に自分の頬におしつけるということになった」

夫人のこの行為は、「私（予測不可能な、他者の視線である私）はあなたを愛しています」という「三人称」のセンテンスを形成する、と Leonard はいう (220)。このメッセージは、「私は、「他者」(the Other) の永久に好意にみちたまなざしに他なりません。あなたが完成すべき、それゆえ完璧に愛しうるあなた御自身にとって、不可欠なまなざしなのです」といったメッセージからは、ほど遠いものである。ダッフィはただちに絶交を宣告 (sentence) する。

ダッフィの “angelical stature” が粉ごなになるのはシニコ夫人の「現実」の “touch” によってである。ダッフィはこの行為を彼の lecture の「解釈」だと思いこんだのだ。しかし夫人にとっては、ダッフィの言葉が何を意味しようと一向に構わないのである。かんじんなことは、それが「自分」に向けられているということなのだ。ダッフィの自己不信 (disbelief) の徴候としての夫人への思い入れが、彼女の自身への “belief” を復活させたのである。ダッフィに「語る」ことを許しているのは自分のまなざしに他ならない、という事実にくらべれば、ダッフィの語る内容などはごく小さな意味しかもたない。夫人は、ダッフィを見つめている者として彼に見られている存在であると自分を見るのである。

シニコ夫人との別離と、彼女の死についての新聞記事を読むまでには、4年間の空白がある。この短篇では、他者たちの directly reported speech はあられない。シニコ夫人でさえ、Rotunda 劇場でひとこと発言したのちは、直接の声としてはあられないのである。だが、

ダッフィ氏がどうしても直面しなければならない他者の声がある。それは “the public” を代表する保守系紙 The Mail の声である。2ページ全体がその記事の引用にあてられる。しかも一語一語正確に引用されていることは、ダッフィ以外の声が直接あられることのないこの短篇では注目に価する。

Kershner は、このテクニックと Portrait 第3章のそれとの類似に言及している (113-4)。スティーブンのほとんど monologic な想念に突然とび込んでくるのは異質の (alien)、説教の声である。The Mail 紙の記事は、スティーブンにおよぼしたものと同じ効果をもたらすという。ダッフィの読後の反応はその記事の文体への嫌悪感である。

The whole narrative of her death revolted him ... The threadbare phrases... the cautious words of a reporter won over to conceal the details of a commonplace vulgar death attacked his stomach.

「彼女の死についての記述のすべてが不快であった。すり切れた言葉、... ありふれた下品な死の詳細を隠すように抱きこまれた記者の警戒心あらわな文体に胸が悪くなった」

ダッフィはこの死亡記事に cliché を感じとる。そして自分の人生がこのような俗悪なものとかかわりをもった (entangled) ことに慄然とする。

ジョイスはこの記事の paragraph を完全に書き改めて、普通ならいわゆる “epiphany” にとっておくはずの読者の注意をここで喚起したのである。この短篇の最終 version は、Kershner によれば “remarkable performance” というべきであって、センセーショナルな暴露への志向と慎重なアンダーステイトメントが細心の注意のもとに平衡を保っていることになる (114)。保守的な Mail 紙は当然、その優越感をともなった tone を維持しようとし、しかも商業的な理由からメロドラマ的スキャンダルを無視できない。ダッフィの胸を悪くさせるような、“in view of certain circumstances of the

case” (D 114) や、“rather intemperate in her habits” (D 115) という迂言法は、事件の俗悪さを隠すとおなじ程度にそれをハイライトしているのである。

シニコ夫人は駅のポーターにとっては“a woman”となり、検死にあたった外科医には“the deceased”である。娘の証言によれば夫人は、“the habit of going out of night to buy spirits”をもった人物となる。シニコ夫人の identity は、その社会的地位とおなじように流動的で曖昧なものとなるのだ。ダッフィはこのジャーナリスティックな文体 (“the threadbare phrases”) を軽蔑するのだが、同時にそれは彼を不安にもする。ダッフィはこの記事に動転し、帰途につくあいだ「*Secreto* (密唱) の祈りをつぶやく神父のように唇をうごかしながら」読みかえすのである。

この記事は、シニコ夫人の“a lady”としてのイメージを保とうとしたばかりに、夫人の他の“cases”から選択的にいくつかを不当に表象することになった。当然、この“a lady”としての表象を保とうとすればするほどいくつかの疑問を生じさせることになる。記事内容の暗黙の非難と矛盾して、見出しは“*Death of a Lady at Sydney Parade*”となっている。実生活を報じる記事もまた、夫人の *sexuality* の表象され得ない要素を切り捨てている。これはダッフィが夫人に対してきた処し方と同じなのだが、彼はもちろんこのような類似を認めようとはしない。ただ、彼自身が下した“*sentencing of Mrs Sinico*”をこの記事の *sentences* が不器用にくり返していることにぞっとするのである。

このニュースに接してダッフィの受ける衝撃はたしかに尋常ではない。

What an end! The whole narrative of her death revolted him to think that he had ever spoken to her of what he had held sacred.

「なんたる結末だ！ 彼は自分が神聖としてきたことを彼女に話してしまったのだ。それを考えただけで、その記事全てに嫌悪を感じた」

“What he had held sacred” とはいふまでもなくダッフィの *ideal image* である。ダッフィの受けた衝撃は、シニコ夫人がすでにこの世にないということではない。4 年間にわたって彼女が「存在」しつづけたということなのだ。ダッフィのひとりよがりの「記憶」とはまったく異質の *life* を生きつづけていたということである。いかえれば、彼を嫌悪にかりたてるのは、夫人が“the Woman”のイメージから遠く離れた場所でダッフィの *construct* の虚構性をあばきだしたということなのだ。そのまなざしを、もっとも好意ある母性的なイメージのもとに保ってきたダッフィにとって、彼の理想自我を鏡のように写しだしてくれるものとして、(彼の三人称の言説を正当化してくれるものとして) シニコ夫人は永遠に彼の記憶にとどまるはずであったのだ。

Not merely had she degraded herself; she had degraded him ... His soul's companion!

「夫人は自分自身を下劣にしたばかりではなく、彼まで貶めてしまったのだ ... 魂の伴侶であるはずのあの人が！」

夫人はダッフィの「記憶」にとっては不可欠な存在ではあっても「現実」の *companion* としては危険きわまる存在であったのだ。こうしてダッフィは、自分のあづかり知らぬシニコ夫人の他の場所における存在“*existence*”を擬似ニーチェ的論理で斥けようとする。

Evidently she had been unfit to live, without any strength of purpose, an easy prey to habits—one of the wrecks on which civilisation(sic) has been reared.

「あきらかに、あの人はこれ以上生きてゆくには不適合だったのだ。目標めざして進む気力もなく、悪癖にたわいなく溺れるとは——文明の下積みとなった残骸の一つにすぎなかったのだ」

しかしダッフィが非難しているのは、再び「彼自身」である。彼は、この同じ“wreck”の母性的な視線に、自らのegoのたいそうなconstructを正当化させてきたのである。シニコ夫人はまさしくダッフィの“civilisation”がそのうえに築かれてきたところの“wreck”であったのだ (Leonard 224)。

夫人がいなくなった今となつては、彼女は“fully”に“memory”であつて、もはや彼の存在欠如をラカンの“object a”のように埋めてくれる「彼」の“memory”ではない。夫人の死は、ダッフィの誤認する能力の範囲をすでに越えて“other” (他者) としての“Emily Sinico”を確立してしまったのだ。

夜がふけるとともに、無力感におそわれ、あの好意あるまなざしであつたはずのものが、よりいっそう自分を非難するように思われる。墓場のかなたから彼につきまとうのは、以前もっていた表象を越えた夫人のどこか他の場所 (“else-where”) における存在感である。

At moments he seemed to feel her voice touch his ear. (イタリックは筆者)

彼女に死を宣告してしまった (“why had he sentenced her to death? He felt his moral nature falling to pieces.”) というダッフィの自己の虚構性を簡潔にあげくのは夫人の他者性に他ならない。一見、自責の念の表明にみえるこの感慨についてこうした見方をとるなら、「粉ごなになる」(falling to pieces) のはダッフィの自我である。

彼がシニコ夫人の生と死に関して、自分の役割を誇大に考えすぎるとか、彼の新たな“self-perception”は感傷的な“self-pity”であるなどと主張するとすれば、それは的はずれというべきであろう。むしろ言葉と記憶が彼を裏切つたのである。

“the light failed and his memory began to wonder.”

ダッフィの記憶がさまよいはじめると、最初に感じた嫌悪は微妙に変化しはじめる。いまやダッフィは夫人に

ついて二つの“memories”をもっている。理想化された“Mrs Sinico”と“degrade”された (すなわち彼女固有の欲望を“assert”する) Mrs Sinico である。

As he sat there, living over his life with her and evoking alternately the two images in which he now conceived her, he realized that she was dead, that she had ceased to exist, ...

「そこに座って、彼女との生活をふり返り、当時の夫人の面影と、いま彼女に対していただくイメージとを交互に想いおこしているうちに、夫人はもう死んでしまったのだということ、もはやこの世に存在しないのだということ、それを彼ははっきりと自覚した」

一方にダッフィの“essential being”を正当化してくれた夫人、他方その表象を超越したもう一人の“Mrs Sinico”がいて、後者の亡霊的な力はダッフィの“essential being”なぞ虚構にすぎないと彼をおびやかす。

4年間にわたって保ちつづけてきたダッフィの“moi”のversionは消滅しかけているのである。“The Dead”のendingでもGabrielは同様の経験をする。シニコ夫人もガブリエル夫人も、男たちがかくも長期にわたって抑圧してきたところの疎外的なプレゼンスとして急速に力を増して彼らに迫るのである。

こうして「他者」(the Other) のまなざしを締めだすべく企まれた「組織的 ignorance」(Leonard 225) は危機に瀕する (“He began to feel ill at ease.”)。主体が徴候としてのthe moiの虚構的構造を信じこむことができるのは、the moiが、他者を自らのego ideal (自我理想) として誤認するために必要とする“a principle of negation” (拒絶の原則) を発動させるからである (Leonard 225)。他者のうちにあつて誤認に寄与しない諸相はすべて否定・抑圧される。

これまで、ダッフィが自分を三人称で言及するという奇妙な「自伝的習慣」によって創造した偏執的な存在をみてきた。自分の声を用いて自己を^{モルフ}対象的に見るという

ことは、“the moi”と“the je”の接点において耳をかすめるはずの声たち（言いまちがい、ためらい、省略、不意の沈黙としてあらわれるのだが）を、つまり、意識にむかって現実的に何かを告げようとする声たちを阻止することなのである。

その存在が動揺したいま、Leonard のいう“fragmented moi” (226) は、これまでダッフィのパーソナリティの底にあって本人には認知されなかったものであるが、こうした地位から、主体によって認められる性格の特徴 (a character trait) とでもいえる地位へと引きあげられる。そしてこの自覚こそ、ある種のもう一つの“moi” (altered moi) の形成を潜在的に準備するのである。こうして一度打ちのめされた主体は一つのレッスンを学んだという感覚を経験できるということになる。

He asked himself what else could he have done. He could not have carried on a comedy of deception with her; he could not have lived with her openly. He had done what seemed to him best. How was he to blame?

「ほかに方法があっただろうか。あの人とともに喜劇的な欺瞞をいつまでもつづけてゆくことはできまい。公けにあの人との生活をつづけることもできなかつただろう。自分にとって最善と思えることをしただけなのだ。どうして自分に責任があろう？」

しかし、夫人の孤独がどのようなものであったかについて、いまやダッフィは次のような感慨にふけることができるようにみえる。

Now that she was gone he understood how lonely her life must have been, sitting night after night alone in that room.

「夫人がいなくなった今となってみると、毎日くる日もくる日も夜ふけにあの部屋に座っていた彼女の生活は

どんなに寂しいものであったろう、と彼は思った」

だが、このように ending ちかくで、夫人について彼がより「人間的な」回想を展開するのは、過去を回復しようとする (restoration) というよりは、むしろ「現在の」ダッフィを再構築 (reconstruction) しようとするためである。ダッフィは夫人を“remember” するのではない。彼自身 (himself) を再構成 (re-member) するのである (Leonard 226)。

Leonard によると、この短篇の“devastating”なのは（「破壊的」という意味とともに口語の“attractive”という含意をもつ形容詞として受け入れたいのだが）、ダッフィ自身が、夫人に対して sentence したような孤独な余生と突然の死を待つべき運命にある、ということでは「ない」。devastating なのは、ダッフィが自己を“re-member” するために、このあと彼女を完全に忘却する、ということなのだ (226)。最後のパラグラフで彼は、

He turned back the way he had come, the rhythm of the engine pounding in his ears. He began to doubt the reality of what memory told him.

「彼はもと来た道をひき返したが、機関車のリズム [“Emily Sinico, Emily Sinico” と響く] がまだ耳に残っていた。彼は記憶の語るもののリアリティが信じられなくなってきた」

そしてある樹木の下までくると、夫人の亡霊的なプレゼンスがうすれ、消えかかっているのを感じる。

He halted under a tree and allowed the rhythm to die away. He could not feel her near him in the darkness nor her voice touch his ear.

「とある樹の下にたちどまり、そのリズムが消えてゆくにまかせた。暗やみのなかで、彼女が身近にいることも、その声が耳に触れるのも感じられなくなっていた」

最後の passage は、バフチン的な意味で、ガイドブック式 reading とは全くちがった reading を可能にする。この短篇集に散見される、ending における perspective の急転に慣れた読者は、すでにその準備ができていとさえいえるのだ。

フェニックス公園の暗がり、しばらく、耳を澄まして彼は待つ。何も聞こえてこない。夜の静寂は完璧だ。もう一度耳を澄ます。静寂だ。

He waited for some time listening, he could hear nothing; the night was perfectly silent. He listened again: perfectly silent. He felt he was alone. (イタリアックは筆者)

“perfectly” のくり返し、“hear” から “listened” への意味の強化は、いわば “Emily Sinico nightmare” の終息を告げる。ダッフィは、ついに (at last)、始めに (at the beginning) もどったのだ。いわば、“self-willed isolation” とでもいうべき心的状態に落ちついたのである。夫人との関係についての “possible failure” への懸念 (Corrington が「不健全な同情」 “a kind of morbid empathy” とよんだもの) (181, qtd in Wicht 132) を抑圧してしまうのである。

その前のパラグラフにみえる “possible failure” への懸念、とみえる passage、

One human being had seemed to love him and he had denied her life and happiness, he had sentenced her to ignominy, a death of shame.

「一人の人間が彼を愛していたように思われた。そしてその者に生と幸福を拒んだのだ。彼女に不名誉を宣告し、恥辱の死をもたらしたのだ」

を、この見方からもう一度その前のセンテンスと合せ読むと、

He gnawed the rectitude of his life; he felt that he

had been outcast from life's feast.

「彼は自分の人生の方正さを噛みしめた。ずっと以前から人生の饗宴からは無縁の存在であったのだ」

ダッフィの感傷とみえるものは実は、プライドと権力意識のまじった、ニーチェ的超人の通俗版のような姿をあらわしはしないだろうか。そしてこれこそ、彼に日々の昼食で arrowroot biscuits を “gnaw” することを可能にしている “self-righteousness” なのだ。

ダッフィのいう “life's feast” とは、彼が「それなし」にもっとも人生を enjoy できるものである。それどころか、彼には、「それなしに」生きる必要のあるものなのである。 (“of all things, life's feast is what Duffy can best live without; it is, in fact, he needs to live without” (Leonard 226) .)

シニコ夫人の死は、ダッフィにもう一つの逸話と教訓を提供した。彼はそれを、主語が三人称、述語が過去形の短いセンテンスで要約したのである。

He had been outcast from his life's feast.

夫人を死にいたらしめたのは自分であるという自責の念に『みえる』想念にいたるのは、そして彼の方正さを「噛みしめる」のは、「塀の陰にひそんで横わるいくつかの人影」を見たときからである。

Those vernal and furtive lovers filled him with despair ... He knew that prostrate creatures down by the wall were watching him and wished him gone.

「こういう金銭づくの、人目を忍ぶ愛欲を目撃してダッフィは絶望を感じた ... 塀のわきに這いつくばった者たちがこちらをみつめているのがわかる。早く立ち去れと言いたげだ」

ダッフィの絶望は、彼らが “wished him gone” だからではない。だれも自分に用がない。人生の饗宴から追

放されているからではない。彼の絶望は、彼らが盲目的な欲望から抱擁しあっているという事実からくるのだ。Circean women の魅惑に自己を喪失した者たち。anorexia nervosa (神経性食欲減退症) の sexual equivalent をもった人物 (pleasure anorexia) とでもいうべきダッフィは、自らを starve させることでその力を確認する (He gnawed the rectitude of his life)。こうした心理こそ、自己をつねにコントロール下においている、それ故、“unique” であるという擬似ニーチェ的自負心を生み出すのである。この文脈で、あの “wished him gone” につづく “no one wanted him; he was outcast from the life’s feast.” は、自らを讃える (self-congratulatory な) 響きをふくんでいるとさえいえるのだ。

こうして先述した最終パラグラフで、ダッフィはあの神話的^{キルツ}自己を回復する。“the night was perfectly silent. He listened again: perfectly silent. He felt that he was alone. (イタリックは筆者)

これは、「彼はしみじみと孤独を感じた」といった寂寞とした心境などではない。一つのレッスンを終了して、始めに enjoy していた “alone but not lonely” という麻痺的充足感の境地にこころよく立ち帰った人物の感慨なのである。

引用文献及び参考文献

Joyce, James: Dubliners, First Modern Library, New York, 1969. Steven Hero, Ed, Jhon J. Slocum and Herbert Cahoen, New York, 1963. A Portrait of the Artist as a Young Man. New York: Viking, 1986. Bostinelli, Rosa ed. ReJoycing, The University Press of Kentucky, 1998. Brook-Rose C. “Palimpsest History”

in Interpretation and Overinterpretation by Umberto Eco. Cambridge U. P. 1992. 邦訳「エーコの読みと深読み」岩波書店、1993。

Bakhtin, M.: Problems of Dostoevsky’s Poetics, ed. Cary Emerson. Manchester, 1984. The Dialogic Imagination. Austin Tx. 1981.

Kershner, R.B.: Joyce, Bakhtin, and Popular Literature Unirersity of North Carolina Press, 1992.

Lacan, J.: The Seminar of Jack Lacan: Freud’s Papers on Technique. 1953-1954. New York. Norton, 1998.

Lemaire, Anika: Jacques Lacan. Bruxells, 1973. 邦訳「ジャックラカン入門」誠信書房、1993。

Leonard, Gary: Reading Dubliners Again. Syracuse U.P.1993.

Ingersoll, Earl G.: Engendered Trope in Joyce’s Dubliners, Southern Illinois University Press, 1996.

Irigaray, L.: This Sex Which Is Not One. Cornell U.P. 1985.

Wicht, W.: [Eveline and/as] A Painful Case] in European Joyce Study 7. M. Power and U. Schneider ed. Amsterdam, 1997.

工藤好美他 Dubliners 注釈、南雲堂、1989。

